

## 自立と共生の教育社会学（その 12）

－未来のための学校－

神 田 嘉 延 [鹿児島大学名誉教授]

### Educational Sociology for Personality Independence and Humanity Symbiosis

#### : Schools for the future (PART 12)

KANDA Yoshinobu

キーワード：個人尊厳の教育と利己主義教育，市民的公共性教育，沢柳政太郎の実際的  
教育科学論，山下徳治の学校教育論，教育矛盾と明日への学校

学校は未来をつくる担い手を作り出すものである。学校の教育のいかんによって、未来は大きく左右される。子どもは、未来をみつめて成長していく。個々の子どもにとって未来への夢や希望は、自由に選択できる権利がある。すべての子どもが、その能力の発達に応じて平等に教育機会の保障が許されることが豊かな未来をつくる基盤である。

今を生きるということだけではなく、未来の主人公として、子どもは学校で学んでいるのである。子どもは自立して、人間らしく生きられるように学ぶのである。人間らしく生きるということは、普遍的に変わらない側面もあるが、時代と共に条件が大きく変わっていくことを見落としてならない。本論では、未来に生きる子どものための学校の役割を明らかにする。

#### 1. 個人の尊厳と市民的公共性の教育

個人の尊厳は、近代民主主義の基本的な原理である。個人の尊厳は、国民教育によって、すべての人々が、この人権を持てる人間になっていくことによって、実現していくものである。個人の尊厳は、自由に個性をより発展させていくものである。それは、封建的束縛の土地と身分制、特権に縛れた人間の存在の解放でもあった。

個人主義は、個性の尊重であり、個々の能力を最大限に発揮できるような考えである。誰でも個人は、人間らしく自由に、文化的に生きる権利をもっている。文化的に生きるための欲望は、社会の発展とともに、より多様性をもっていく。しかし、最低限求められる水準は、それぞれの文明社会、地域社会に平等に保障されていなければ人間らしい生活をすることができない。

平等に保障される内容の水準は、都市と農村で、また、国によっても異なる。日本農村では車が必要なければ生きていくことができない。公共バスの廃止によって、農村では新たな貧困問題が起きる。子どもや老人にとって生活手段が奪われるのである。

特に、拡大していく格差社会のなかでは、権力を握る人々、金銭的に恵まれている人々と、貧しい人々の層との矛盾関係は厳しくなっている。このような中で、市民的な公共性をもって貧しい

人々のことや差別されている人々のことを考え、貧困者の自立を援助していく課題が社会的に求められる時代である。人間は、他者との関係で分かち合っていくことによって、動物的な生物学的なヒトから社会的な人間になったのである。人間の本質は利他主義であり、常に動物的な存在との闘いのなかで人間になっていくのである。

絶対的利己主義は、個人の尊厳、個性を尊重していく個人主義や他人との分かち合いの利他主義に対立する概念である。従って、庶民がもっている自己の生存のための欲望、厳しい弱肉強食社会のなかで精一杯頑張って他人がみえないで自己中心的に生きている人々、人間らしく生きたいと個性をもって集団に外れる活動、強い自己主張をもっているものを絶対的な利己主義としていない。

また、宇野重規「私時代のデモクラシー」での現代の平等社会の自意識過剰によって、自分が同等者の総体の一人であるという無力感にさいなまされるという見方がある。かれは、封建的な身分制の廃止、閉じた共同体空間の崩壊、閉じた身分制の壁の崩壊、階層間の著しい変化による社会的平等の醸成による不平等意識の高まり、同じ階級として団結すべき人々はどこにいるのかという答えをだすことは難しい時代であるとする。

私という個人の自意識、オンリーワンになれないことに対する不平等意識の高まり、なれないことに対する行き場のない不安へと募るばかりというのである。このように、オンリーワン志向の私時代の新しい個人主義の問題を考えるのである。他人と違う自分らしさを追い求め、すべてに自己決定を願う個人主義の出現、私の尊重というエゴイズムを強調する。これは、弱肉強食の競争社会のなかでの立身出世志向の強かった「敗者」による権威主義から生まれたものである。

私時代の平等社会の自意識過剰による不安の社会的増大ということは、現実の経済的な格差社会の拡大の現実を見落としている。また、東日本大震災にみられるように若者をはじめ多くの国民がボランティアに参加することが激増している。さらに、原子力発電の廃止を求める国民意識の高揚は、新たな再生エネルギーの創出を各地に展開している。これらを見落としている。

私時代という問題提起は、個人の尊厳を現代的に個性の尊重を著しく豊かな科学・技術、生産力発展、物質的な文明の豊かさのなかで、多様性がより可能になり、自分のやりたいことが可能な生産力発展段階で、それなりの意味を持っている。

しかし、それは、物質的に可能になったことであり、社会経済構造との関係では格差が増大していることを見落としている。個々がやりたいことができるということと、それぞれの分野においてオンリーワンになることは別である。競争社会のなかでつくられたオンリーワンであり、個性を伸ばしほんとうに自分自身がやりたいことを見つけ出し、それを貫き通していくオンリーワンではなく、自分自身が有名になりたい、自分自身しかやっていない分野で勝ちたい、トップになりたいという欲望が根底にあるのである。ナンバーワンから派生した一つしかない商品開発、特殊性を活かして市場競争を勝ち抜くという発想からの自分の個性、発想を最大限いかしていく多様性のなかのオンリーワンの見方ではない。(1)

## 2. 沢柳政太郎の実際教育科学論

沢柳政太郎は、1865年から1927年に文部官僚、教育学者、成城中学・小学校の校長の要職に就

いた人である。彼は、日本の近代教育界で活躍した人である。沢柳政太郎が校長になる私立成城小学校創設趣意書は、個性尊重と科学的研究を基とする教育を進めるうえで極めて重要な宣言であった。沢柳は、文部官僚のエリートコースを歩んだ。1917年4月に成城小学校の創立の校長になる。沢柳は、日本の近代化のなかで、教育実践の先頭になったのである。

成城小学校の創設趣意書では、1、個性重視尊重の教育、2、自然と親しむ教育、3、心情の教育、4、科学的研究を基とする教育であった。4つの原則は、大正デモクラシーの影響のもとで形式的な殻の教育から生き生きとした革新的教育の変革へとなったのである。

第1の個性尊重教育は、煩瑣な教授法や教授細目の形式にこだわって最小限の分量の知識をくどくどこねまわしているのではなく、自由に個人の能力に応じての教育を考えたのである。余裕があったら教科書以外のものを教えることを構想した。そこでは、注入教育、詰め込み教育を極力さけ、教授の方法も教材の分量も固定した形式にとらわれずに、個々の具体の生きた教育を実施することを目的とするものであった。

第2の自然と親しむ教育は、大都市の生活をしていることから、幼弱なる児童の心身形成を求めたものであり、早熟に神経過敏となっている弱点を克服することにあつた。自然と親しむ教育は、正常的な健全な発育を努めようとするためである。自然を相手に田圃林野で大空のもと、大地の上で出来る限り多くの時間を与えて教育の実践を考えたのである。

ここでは、自然科の課程を採用して、学校園を利用しての自然物を愛する教育を養うものであった。児童固有の心身発育の過程を重んじて、遠き祖先の原始的生活を繰り返すことによって心身の健全なる発達を図る教育の実施であった。体育としては、人為的な体操よりも児童の自然を愛好する遊戯を重んじたのである。

第3の心情の教育は、教師が子ども達に愛情を深くもつことである。このことによって、子どもの気分、興味、欲望を理解し、同情しえるほどの敏感な心をもつことができるとしている。

成城小学校は、教育的研究に重きを置く学校であるから、明瞭な頭脳をもつことは必要であるが、それよりも温かい心情の人たることを重視した。このことによって、師弟の関係は真に人格対人格の関係で、心から心への教育が出来るように確信したのである。教師の人格の内なる情操の発達によって、自然に道德教育、美の人格教育ができるものと考えている。崇高なる生活をなし、高尚なる趣味を味合うことで、教養ある人格をつくりあげるのが成城小学校の理念である。

第4の科学的研究を基とする教育とは、研究の学校として、実際の教育理論を構築するためである。それは、日々の経験に重きを置き、綿密なる観察実験によって、教育の実際に科学的根拠を与えたいということである。

以上の4つの原則によって、成城小学校の教育実践をしていこうとする趣意書である。沢柳は、教師には階級がない、その責任には軽重がないと強調する。政府の組織は階級制度である。軍事社会の如きは階級制度の最も厳格に整頓したものである。実業社会においても種々の階級がある。しかし、教育社会には階級というものがない。教師は皆同じ重みの仕事をして、同じ責任をもっている。教師の仕事は皆平等であり、命令服従の関係はないという沢柳の見方である。

従って、沢柳の考えから、学校長が教師に指図できるのは、法令の規定に背かないようにすることだけであり、学科の内容や方法の実行上のことは指図できないとしている。教師は教室で自由自在に自己の思うままに行動することができるという原則をもっている。(2)

沢柳が考える教師の仕事の責任性は、現代日本における教師の仕事のあり方にも言える。学校管理運営の強化によって、教師自身の自由なる教授の自由を奪うものではない。学校長が教師に監督できるのは、法令違反の行為であるときである。教師は最も自由に最も自在に自己の実力を発揮することによって、子どもの教育に有効な教育実践ができるとしている。この自由な教育実践を保障していく前提に、教師が教育に従事するのは自己のためであるということを許さない。教師の仕事の世界は、自己が主であることを許さない社会であるということを強調したのである。

これは、教師が自己の感化を生徒に及ぼすことは誠に大なるもので、教師自身の人格の発現は他の社会に及ぶものではない。教師の教育実践は、自我の発現のために存するのではなく、生徒のために活動する。教師は常に生徒の利益を図るために活動するものである。教師は生徒に対して親切であり、教師が骨を折るのも、勉強するのも、自ら修養するのも、皆生徒のためである。教師は自己を主として生徒を客とするようなことがあってはならないのである。教師のあり方として、自己保身、自己利益を嫌ったのである。児童・生徒をすべてに第一に考えて教師の仕事があるというのが沢柳の見方である。

教師の職は高尚なのであると沢柳は考える。教育の職は万物の霊たる人間を相手にする仕事であり、直接に人間を相手にするものである。心身の発達を助け、良知良能を啓発する職分である。教師が相手にする人間は、幼年の時期、或いは青年の時期であり、この時期は人間の一生において最も大切であると沢柳は考える。

### 3. 山下徳治の「明日への学校論」からの現代的に学ぶことはなにか

山下徳治は、鹿兒島市西田町で育ち、鹿兒島師範学校を卒業して、1913年に母校の西田小学校の教諭になった。そこでは、哲学を猛勉強した青年教師であった。1918年に台湾で教諭の仕事をする。1920年に同じ鹿兒島出身の小原国芳から、前記での成城小学校への招聘を受けて、沢柳政太郎の校長のもとに算数教育を中心とした教育実践の研究をするのである。

海老原治善は解説「山下徳治とその教育学」で、未来の社会創造と教育の役割について次のように述べている。山下は、成城小学校での教育実践の研究ではデューイの社会と学校の関わりに強い影響を受けた。そして、マルクス主義への思想的な接近もあり、新天地を求めて、1928年に成城小学校を去って、自由学園に転任している。ソビエト教育の関心からソ連訪問をして、ヴィコツキー等との会見をしている。訪問の成果は「振興ロシアの教育」の出版である。

山下は、第1に教育の社会性を提起して、教師と生徒とを限定するだけではなく、広く民衆の自己教育を考えた。第2に民衆の階級的形成が教育の基底におかれる。第3に教育の現代性として民衆教育を真の社会教育としたのである。教育は将来の社会を建設すべき未来のための人材養成を本来任務とした。山下徳治著の「明日への学校」の出版は、人間形成の科学として、生活と経験による直感教育法の基礎を技術教育に見いだしたと、山下教育学の成果と課題を提起している。海老原

治善は以上のように山下の教育論の特徴を述べる。(3)

科学としての教育学を根本的に転向させるのが山下の狙いであった。山下は教育学の研究態度論として、教育現象が近代社会のいかなる過程において発生し、学校教育に発達したかを十分に究めるならば、近代社会に学校教育が与えた機能が明確になるとしている。教育学の研究は、近代学校機能に基づいて体系を打ち立てていくことが大切であるというのが山下の問題提起である。

校外教育運動が放課後の隣保地域の生活指導等生活と有機的連関をもっているが、それは、決して学校教育と対立されるものではなく、また、二元的に考えられるものではない。いかなる教育問題も現代では、学校教育を中心に考えなければ、その具体的な意義は忘却されてしまうと山下は考える。

さらに、山下は、学校教育の存在価値は現実的に重要な社会的課題を負っているということからではなく、その課題を自ら実現していくときに初めて生ずるとする。教育計画は、政治、経済、文化に基本的に連関をもっている。学校は計画による意識的な指導の場である。計画のない無意識的な指導の場は、本論での学校教育実践とはいわない。(4)

山下は、教育の利己主義という新たな概念を明示する。教育の利己主義は、父母が自分の子どものために、教育者が自己の地位を擁護すべきことで主張することであり、教育者自身が父母の利己的な教育要求に従属して、自己の地位を利己的擁護することを教育の利己主義とするのである。それは、個人的、党派的な現実在即し、社会のあらゆる領域にわたって教育ほど国家や社会、また、国民や人類全体の幸福なる未来的発展を純粋に自己の使命とするものはない。

山下の考える教育は社会文化の建設にとって基礎工作であるとする。近代の学校教育はひとりで思いついたものでも勝手に工夫して作り上げたものではなく、近代社会が、自己の指導、自己の発展のために生み出したものである。教育改革を議論するときに、常に社会的機能として発生した学校教育を考えていかねばならないということが山下の教育に対する基本的な見方である。

そして、現行の入試制度は学校教育の根本的な矛盾をもっていると山下はみる。それは、小学校教育発展の最大の妨害者であり、7割、8割の非受験者の義務教育完成期教育を不徹底ならしめ、受験児童の体位を著しく低下させ、父母、子ども、教師の教育に関する態度を利己的にさせるものとしている。(5)

山下にとって、教育の実験研究は、哲学や理論的研究では達せられないとする。科学的な指導のみが各教師の日常的教育活動を組織してくれる。新しい地盤を学校生活の中から築いて行かなくてはならない。教育の実験的研究は、生活の中から取り出された成果が何よりも教育的事物や現象を深く観察すると考えた。これは教育全体の社会的機能と連関させて、その本質を摘み出す方法的な態度であるとする。それは、単に方法論的研究の結果として与えられたものではない。科学的実験における新しい疑問にぶつかったときには、新しい解明的方法や装置の工夫が重要になる。

このような原理を教育上の問題解決に当てはめるときに、子どもの生涯の幸福を人類全体の倫理、人道上の問題を考慮しながら、最善の態度を教育的実験で選ぶべきと山下はみる。また、教育の特殊性として、教育の社会性、歴史性から要求される発生的方法を科学的方法にしなければなら



ないとしている。教育の現実には歴史的現象として、未来へ連続発展して時間的存在や現象であるという方法的態度が重要であるとする。(6)

教師は教養として、何を修得することが必要なのかと山下は問題提起する。教養は、児童に具体的経験を与え、その経験の過程においての問題発見、問題の処理、応用における既得知識の再吟味の仕事ができるようになる。これらの仕事に、教師自らの経験的知識が最も示唆を与える。教師自身の教養確立は、教師自らの教育活動が大切である。教育的現象、社会的諸事象を教養の力で理解することは、教育上の重要な問いを発見する。そして、自らその解決に必要な知識は、教師の教養から求められる。(7)

山下は、人間経験的蓄積の三つの特質ある時期をみる。人類的な経験が子どもの発達段階として重要である。ままとにおける自己中心主義の言葉は、初期の発達段階であり、文字や数学を学ぶようになると経験的交流の武器は一層と強化される。しかし、遊戯としての経験にしても事物や道具に即した経験活動になる。

児童がこの経験から引き離されて言葉や文字の記号を覚えることだけに専念されるならば危険なことである。子どもの経験による真実なる知識から抽象的な不確実的な知識を与えていくことになり、経験交換の手段としての意義が失っていく。自己の経験を正しく表現することも他人の経験記録を正しく読むことができない。

経験の合理的組織は論理的思考を与えてくれる科学的教科によって達せられる。経験を中心として、それを拡充し、それを組織することによって、人間はいよいよ正確なる知識が得られるのである。そして、そのような知識を得ることによって、発明・発見時代の知識ともなる。文化の発展は、予見し得る展望と洞察力を与える基礎知識ともなるのである。以上のように山下は人間の経験的知識・技能蓄積の段階と、子ども発達段階の知識技能取得方法を対応させる。(8)

山下は、学科の編成原理を三段階に分ける。学科課程構成の骨組みは、第一段階に経験を基礎にした業務、作業、美術等の一切を含んだ技術教科であり、第二段階に経験を媒介としてのニュース的価値ある時事的報道、文化、資源に関する報道、地理、歴史等であり、第三に経験の組織を合理的にするために科学を対象とする教科がある。基礎（記号）教科としての読み方、算術は、最も基礎的な意義を有している。児童教育における国語教育の目的は文学論の立場からするのではなく、言語機能から要求される。その仕事を基礎として技術獲得とする。数学が科学的思考を発達させるのに役にたっているが、算術の第一の仕事は、記号を自由に支配するための基礎訓練である。第二の仕事は経験における特殊現象をその記号によって、一般的に表現し理解できるように養成することである。

体育と音楽は整理と精神とに連関した教科である。学校が児童の生活の場となり、作業的活動が経験の中軸として与えられたとき、二つの教科は重要になっている。体育は生理面の作業における不自然なポーズを矯正し、鍛錬によって強靱なる健康を与える。筋肉の弛緩と緊張の技術的支配による自己の身体を自由に駆使でき、勇気、果敢、決意等の精神力となってあらわれる。音楽は感覚のリズムを与えて生理的に快適になり、感覚が秩序ある身体的活動を起こさせる。音楽は感情を浄

化、純化し、感情を豊富にして想像力を発達させる。

道徳は、各教科学習の全般を覆っている仕事であり、修身科の特設は却って道徳教育の仕事を局限し、その価値を低めるものである。教育の仕事は全体として道徳的でなければならない。(9)

それぞれの教科の構成原理を山下は、経験を基礎とした段階、経験を媒介としたニュース的価値の段階、合理的組織された科学と第三段階からのべる。それぞれの教科を三つの段階から位置づけているのである。

山下は技術をすべての教科の普遍的な原理として、教育実践のなかで積極的に位置づけていることも特徴である。精神発達の基礎に技術をみているのである。技術による思考は、あらゆる人間知に至る温床であるとする。真の精神力の発揮されるところは、必ず技術への信頼がある。技術による思考の優位は具体物による思考結果が直観的に正しく判断できるから思考の過程を自ら検討し、訂正し、正確なる思考を導くのである。

さらに、事物の機能を正しく活かすために技術の役割を発見することは、各教科での大切な課題である。技術を活かすことを理解することによって、その事物にかんする知識を本質的に理解し得ることになる。このために、児童には、まず事物や技術によって正しく思考し、正確なる知識を得る練習があらゆる学習の基礎として必要であると山下は考えるのである。

そして、感覚と技術の関係についても山下は次のようにのべる。感覚そのものは身についたものであるから、その感覚が自ら思考し、自ら訂正するものである。それによって得た正しい技術と知識とは、生涯身についたものとして自由に使用し得ることになる。泳ぎを覚えた者が一生泳ぎを忘れないのと同じに。こうした知識こそ真の生涯としての知識であって、それは自ら方法的に獲得されたものである。

かくして得られた知識はいわゆる発見・発明の母体なのである。直接科学的知識の獲得をめざした理科学習では、実験によらない学習は全く無価値である。その実験過程における思考手続きは、道具の使用における技術修得上の手続きと全く同じである。(10)

生活手段の技術こそは、国民教育の基本的課題である。山下は国民教育の全体の課題として、技術教育を位置づけている。地理なり、歴史なりの全教科の根底は、人間知性開発の最も真実なる基礎として、人間の生活手段の攻究なくして、未来社会の担い手の教育実践には結びついていかない。こうした意味から技術教育の問題は、全教科の基本的な課題とみるが必要になってくる。技術による思考、技術活動のうちに自ら考える力を発達させることが最も確実な知識技能の開発手段であると山下は考えるのである。

#### 4. 現実の教育矛盾克服から未来への学校創造

沢柳や山下の考えを現代的に踏襲していくうえで、現実抱えている子育て、教育の矛盾、社会がもっている様々な問題状況を直視することが大切である。未来は、現実と無関係な空想的なことから出てくるものではない。未来社会は、過去の歴史を継承しながらの現実社会があり、現実の矛盾、現実社会が抱えている課題を克服する過程の中に未来が創られていくのである。教育は現実の人間社会が到達してきた文化、知識、技術・技能を踏襲しながら、矛盾を克服し、課題を創造してい

くことに未来が見えてくるのである。

現代社会に生きる子ども・青年にとって、未来社会を見つめていくうえで、自由、平等、友愛という課題をグローバル化した弱肉強食の資本主義から離れることができない。日本国の憲法は、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと国家の名誉にかけて崇高な理想と目的を達成することを全世界に誓ったのである。

現代の子ども・青年は、平等に能力に応じて教育を受けられる機会が保障され、すべての子ども・青年が学校に行けることが形式的に可能になった。しかし、重要なことは、家庭の経済格差によって、実質的に教育を受けられる条件は同じではなく、教育を受ける権利は、経済的理由から平等ではない。その矛盾の典型は、子どもの貧困化のなかでみられている。

現代の学校教育問題で、そこで働く教師達が未来に対して夢と希望をどれだけ子どもや青年に託しているのかということである。教師達が自分の仕事に生き甲斐をもって、自発的に意欲をもって、創意工夫をもって楽しい授業、やりがいのある学校での仕事をしているのかということがまず問われる。

学校では職務分掌によって学校運営がされていることから、それぞれの任務分担で個人的に任せられている。日常的な業務が個人責任体制になっており、管理者が直接的に労働を把握して職務遂行を実行していくものではないしくみになっている。現認で勤務時間を校長が把握することができない学校教育の仕事上のしくみである。とくに、職務分掌による個人責任性の強い教師の仕事は、家に持ち帰って仕事をしなければならない実態があることも見逃してはならない。組織として集団的に責任を果たしていく体制ではないので、無理をせざるをえない状況を管理者も的確に把握できにくいしくみである。

ここには、教師の働き場が孤立して、個人責任を強要する校務分掌がある。この校務分掌のあり方を仕事の加重にならないように、日常的に集団的な責任性をもたせながら、個人の役割責任の抜本的な見直しが求められている。そして、加重労働の現実に対しては、きちんとした人員要求を教育行政にあげていくことが必要である。

個人的な責任体制の現状では、教師の責任感、使命感の強さから、無理をしてまで仕事の遂行をしてしまう。集団的な責任体制になっていけば、無理なことをきちんと教職員組合をとおして要求していくことが、より可能になっていく。どんなに特別の事情のときでも労働安全衛生の視点から週45時間以内におさえていく教師の仕事のあり方が問われているのである。

教師の長時間労働は、その仕事内容も自分の専門分野の教育活動によってではなく、自分の専門外の部活動担当、教育行政等指定による公開授業研究、教育行政等報告書などもあることを見落としてはならない。学校の行事活動、部活動担当の見直し等教育活動の再検討が求められているのである。

教師の労働時間は、平成29年4月28日に公表した文部科学省初等中等局の教員勤務実態調査によれば、小学校で平日11.45時間、土曜日2.15時間、中学校で平日11.52時間、土曜日4.33時間となっており、その長時間労働の実態が明らかになっている。労働時間は労働基準法32条に



よって週 40 時間と定められているが、残業は特別の事情のあるときに 1 ケ月 45 時間範囲とされている。働く人の安全と健康を守ることから、行政指導が行われているのである。

残業 100 時間以上を越えることは、過労死状況であると労働安全衛生からいわれる。教師の仕事が過労死状況というのが一般化している驚くべき状況である。日本の未来の担い手を育てる仕事に就いている教師が過労死状況で働いていることに、教育の対象である子ども・青年は、教師の忙しさをどのような目でみているのであろうか。公立の小中学校の教員は労働時間の上限規制を越える規制外であり、直接に設置者として責任をもっている教育委員会は、罰則違反にならないしくみになっている。

教師の操作的な指導案に替わる子どもの意欲・自発性を尊重して自由に生活体験、実験・観察による真理探究ができる授業書への取り組みが切実に求められている。言語や算数の取得において、トレーニング的な要素があることは否定できない。楽しい授業には、学習課題のトレーニング的な要素を持っている場合においても、子どもの興味関心、生活体験からの動機や直観的な認識が大切になってくるのである。

そこでは、トレーニングによって、表現が的確にでき、意志の通じることが豊かに情操をもっていくことの楽しさを工夫していく授業のあり方も模索していくことが不可欠である。学ぶことは楽しいことであり、わかることは喜びであるという認識が大切である。働くことで同じことが言える。現代の労働現場では、楽しくない疎外状況があり、この状況をいかに克服していくか。

最も楽しい働き、喜びのもてる働き方から遠ざけられていた障がい者の雇用・労働問題は、労働疎外と学びの重要な問題を提起している。虹色のチョークの職場と言われた障がい者でも楽しく、喜びをもち、健常者を逆に励ましているところがある。ここには、未来の働き方の社会を模索する重要な学びのヒントがある。(11)

学校は未来を創造する人材を育てていくところである。学校が未来の輝きの場になることによって、素晴らしい明日への道を示すことになる。未来に向けての新しい動きから学校は学ぶことがたくさんある。

## あとがき

紙数制限で十分に展開することが出来なかった。本論の詳しい内容は、「未来への学校教育」（鹿児島学術出版）として出版する計画である。「自立と共生の教育社会学」として、11 年間にわたって執筆してきたが、（その 12）でけじめをつけたい。教員養成を主とする教育学部で教育社会学を担当してきた。早期に定年して稲盛アカデミー、南九州大学で教鞭をとってきた。常に南九州の人々の生活と地域を考えながら日本の未来を担う子ども・青年の発達を社会との関連で教育・研究をしてきたつもりである。そのまとめを毎年、紀要という形で執筆してきた。

鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要での「自立と共生の教育社会学」と密接に関連をもっている論文・著書として、次のものがある。これらはすべて、自立と共生の教育社会学という視点から学校教育実践にアプローチしたものである。(1)「青年期の社会的自立と責任感の形成」鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要第 3 号 73 頁～118 頁（2012 年 3 月）。(2)「地域風土からの教育創造－

三澤勝衛の教育論から－」南九州大学人間発達研究第3巻19頁～36頁(2013年3月)(3)「現代社会における日本の教員養成」南九州大学人間発達研究第4巻23頁～54頁(2014年3月)(4)「農は脳と人をよくする－子どもの発達と地域－」学研1頁～232頁(2016年5月)がある。

注

- (1) 宇野重規「私時代のデモクラシー」岩波新書、13頁～17頁、162頁～163頁参照
- (2) 沢柳誠太郎全集6「教師と教師像」、国土社70頁～72頁参照
- (3) 山下徳治「明日の学校」明治図書、解説・海老原治善、237頁～260頁参照
- (4) 前掲書、26頁～31頁参照
- (5) 前掲書、34頁～36頁
- (6) 前掲書、43頁～45頁参照
- (7) 前掲書、157頁～158頁
- (8) 前掲書、163頁～165頁
- (9) 前掲書、166頁～168頁
- (10) 前掲書、169頁～171頁
- (11) 小松成美「虹色のチョークー働く幸せを実現した町工場の奇跡」幻冬舎参照